

# ザンビア南部州におけるヒューマンネットワークの概要

石本雄大

総合地球環境学研究所

## 要旨

本研究の目的は、ザンビア南部州で暮らすトンガの人々が築く日常のネットワークを明らかにすることである。また、こういった日常の人間関係が形成される状況についても報告する。

調査地で観察される主なヒューマンネットワークには、親族ネットワーク、地縁ネットワーク、教会ネットワーク、学校ネットワーク、レクリエーションにおけるネットワーク、現金獲得上のネットワークがあった。

またヒューマンネットワークの形成には、新たなネットワークの構築がなされる場合とネットワークの再構築がなされる場合とが考えられた。前者には婚姻、移住、就学、就業など、後者には婚姻、移住、離婚、卒業、離職、所属教会の変更、村の独立などが考えられた。本稿では、親族ネットワークの構築および再構築に強くかかわる婚姻に焦点を当て、ヒューマンネットワークの形成について考察した。その結果、近隣村の成員同士の結婚が多いこと、村の属す旧地縁集団の出身者同士の結婚が高い割合を占めることが明らかになった。

## 1. はじめに

Fig. 1 のようなヒューマンネットワークは日常生活の中で築かれる（以下、図は全て英文報告書を参照）。そして、その中の一部は、生態的もしくは社会的問題が生じた際の解決手段として利用される。そのため、ヒューマンネットワークはレジリアンスの構成要素の1つであると考えられる。

ネットワークは問題発生時の状況に応じ選択されるため、毎回同じものが活用されるとは限らない。そのため、非常時に活用されるヒューマンネットワークについて議論する前にまず、ネットワークの全体像を把握することが重要である。本研究の目的は、不安定な生態環境である半乾燥熱帯に位置するザンビア南部州で暮らすトンガの人々が築く日常のネットワークを解明することである。そして、こういった日常の人間関係が新たに構築される状況および再構築される状況についても報告する。

また、本研究においてヒューマンネットワークという語は、人々の間に成立するつながりの構造と、そのつながりの間に発生する行為やモノの流れ（やりとり）を意味する。本年度は前者のつながりの構造について記すこととし、後者の行為やモノの流れについては来年度以降に報告することとする。

## 2. 調査概要

調査地は、ザンビア南部州シナゾングウェ地域<sup>\*1</sup>の低平坦地に位置するサイトA、中間の傾斜地に位置するサイトB、高平坦地に位置するサイトCであった。いずれのサイトにおいても住民の大部分はトンガの人々であった。Fig.2 に調査村を示した。他のプロジェクトメンバーとの合同調査村を赤印、報告者が追加した調査村を青印で表した。

調査期間は乾季中、6月末から10月末までであった。調査方法は直接観察およびインタビューであり、一部のインタビューには質問票を用いた。主な調査項目は、ヒューマンネットワークの種類、各ネットワークの特徴、婚姻、出身地であった。

## 3. ヒューマンネットワーク概観

調査地で観察される主なヒューマンネットワークには、親族ネットワーク、地縁ネットワーク、教会ネットワーク、学校ネットワーク、レクリエーションにおけるネットワーク、現金獲得上のネットワークがあった。本稿ではこれらの特徴を順に記述していく。

### 3-1. 親族ネットワーク

本節では調査地域において大多数を占めるトンガの人々の親族組織の特徴を記述する。具体的なネットワークについては、第4章において婚姻の事例を取り上げる。

トンガの人々は、Fig.3 で示したようにグウェンベ・トンガとプラトー・トンガとに大きく分けられた。サイトAおよびサイトBの人々は主にグウェンベ・トンガであり、サイトCの人々は主にプラトー・トンガであった。

更に小さい集団としては、クラン（以下トンガ語で*mukowa*）が挙げられる。*mukowa*の名には、ウシ、サル、ヤギ、シマウマ、イヌといった動物名や、カボチャの葉や種子といった植物関連の名があった<sup>\*2</sup>。グウェンベ・トンガおよびプラトー・トンガにまたがる*mukowa*も多かった。同一クランの成員には、年長者と年少者の間にはオジーオイ<sup>\*3</sup>の関係が、同年代の者の間にはアニーオトウトの関係が成立していた。

トンガ人の婚姻制度は、一夫多妻制であり、夫方居住であった。また、子は基本的に父親の名を姓として使用していた。一方*mukowa*は、母親のものを継承していた。

土地相続では、子が父の土地を基本的に受け継いでいた。しかし、土地が不足している場合には、父方だけでなく母方の親族からも土地を譲り受ける場合があった。

### 3-2. 地縁ネットワーク

カリバダム建設に伴う強制移住、および、その後に自主的に行われた再移住により、地縁ネットワークには大幅な変化が生じた。ここでは代表的地縁ネットワークである村組織を取り上げる。まず、調査地域における村の特徴を、次に各サイトにおける村成立の特徴を記述していく。

\*1 本稿ではシナゾングウェ県および隣接するチョマ県をさす。

\*2 トンガ語でウシ *muwiinde*、サル *muchinba*、ヤギ *mulea*、シマウマは *mugonka*、イヌ *mukuli*、ワニは *muetwa*、ウサギは *musanje*、カボチャの種子は *mutanga* であった。

\*3 年長の男性は *aisha*、年少の男性は *mujuwango* と呼ばれていた。

調査地域において、村の特徴は大きく5つ挙げられる。①複数クランの人々が混住すること、②自治組織の単位となること、③未利用地は村へ属し、村長や村委員会により使用の承認が行われること、④道路整備等の共同労働を行われること、⑤井戸建設や食料援助の際の受給単位となることである。

村成立の特徴は Fig. 4 を見ると、1957年のカリバダム建設開始後にサイト A で新村が急増し、その後サイト B やサイト C でも村が増加していたことがわかる。Fig. 4 の村の成立年とは、伝統的首長によって村長を置くことが承認された年のことである。即ち、村の成立年以前からその土地に村人が住んでいた場合もある。またこの図では、サイト B およびサイト C において、調査地以外の村の情報が記されていない。これは、サイト B およびサイト C では、調査地以外の村について十分な調査を行うことができなかったためである。

サイトごとの村数の増加の経緯を述べる。サイト A では、ダム建設の際に現在のカリバダム内の土地から多くの村々が移住を強制され、新村を作った。移住前に近接していた村々は、今もなお、旧地縁集団 (*Chilonga, Dangwe, Landani, Njola*) に属している。同様にダム建設前からこの地域に存在する村々も独自の集団名 (*Buleya*) を持っていた\*4。

Fig. 5 は、サイト A の村々をその旧地縁集団ごとに色分けした図である。村長もしくは副村長の家屋の緯度経度データを地図上に示した。強制移住以前から存在していた *Buleya* の村々は、特にナゴンベ川沿いに集まっており、それ以外の集団はその周囲に形成されたことが分かる。また、*Chilonga* や *Landani* は比較的散在していることが明らかになった。

サイト B は、広大な未利用地が広がっていたため、サイト A に設立された新村の土地条件が悪化するとサイト B へ再移住してくる者が相次ぎ、複数の村の出身者により構成される新村の設立がなされた。サイト C には、カリバダム建設以前から村が存在していたが、サイト A に設立された新村の土地条件が悪化すると、サイト B と同様に再移住者が相次いだ。

### 3-3. 教会ネットワーク

調査地域では、大部分の人々はキリスト教徒である。ここでは、調査地域におけるキリスト教教会系の特徴を記述していく。

調査地域には複数の宗派の教会が混在していた。Pentecostal、Seventh-Day Adventist、United Church of Zambia、New Apostolic Church などである。教会は大きな町だけでなく地方の村々にも建立されているが、Fig. 6 のように、教会が一つもない村、複数の宗派の教会がたてられている村があった。多くの人々は週末に礼拝に行くが、一部の人は信仰深くなく教会に通っていなかった。人々は、複数の宗派の中から選ぶため、必ずしも最寄りの教会に通うというわけでない。また、夫婦はおおむね同じ教会へ通っていた。教会は礼拝の場を提供するだけでなく、大きな町の教会は医療及び教育の施設を持つこともあった。

それぞれの宗派が、広い地域から多くの支部の参加する大規模な集会を年に2、3回開催していた。例えば New Apostolic Church では、大規模な Good Friday (4月)、Harvest (8

---

\*4 ただし、*Buleya* に属す村の中にも、ダム建設以前に設立されたものがある。Fig.4 および Fig.5 の A6 は A8 から、A40 は A1 から独立した。

月)、中規模な meeting of comity (10月) を数日間に渡り開催していた (Fig. 7)。その他にも、少数の支所のみで小規模に催す音楽祭 (Fig. 8) など、複数のイベントを開催していた。これらの集会のため、歌の練習、会の準備、当日の食事・宿泊をともにするので同じ教会のメンバーは親交が深まる。

### 3-4. 学校ネットワーク

小学校は複数の村に対して1校建てられているため、児童は村を越えての知人・友人を獲得する (Fig. 9)。また、児童だけでなく、運営を支援する親同士のつながり (PTA) もできる。特に Community スクールは近隣の村人によって資金の工面がなされるため、政府系の学校よりも親同士のつながりが強いことも考えうる。また、高校は数が少なく大きな町にしかないので、生徒は寄宿生活を送る。例えば、シナゾングウェ県では、Maamba に1校しかない。そのため、生徒は小中学校よりも広域に友人を得ることができる。

### 3-5. レクリエーションにおけるネットワーク

本稿では、選手だけでなく、観戦などでより多くの人に係るサッカーを取り上げる。

乾季中、シナゾングウェ・ディストリクトの各村<sup>\*5</sup>が参加するカップ戦が行われていた。まず収穫後4月末から9月は各地区(1地区10チーム弱)で総当たりのリーグ戦が行われ、その上位2チームが10月からトーナメント戦に参加していた。

同一チームの選手・応援団ともに結束が固まっていた。同時に、頻繁に相手チームの関係者とも顔を合わせる事となり親交が生まれていた。また、トーナメント戦では自らの村のチームが敗退してしまった場合にも同地区のチームを応援に出かけるため、他の村のメンバーであっても知人となる場合、親密となる場合があった。

### 3-6. 現金獲得活動上のネットワーク

現金獲得活動におけるヒューマンネットワークは、地元で活動する企業での就業、都市への出稼ぎ労働、域内での商業活動の際に形成されていた。

調査地域で活動する企業には、農業関連企業、道路工事を行う建設会社、鉱山会社、煮干大の小魚カペンタを出荷する会社などがあつた。また、出稼ぎ労働は、南部州の都市(チョマ、リビングストーン)、首都ルサカ、まれにコッパーベルト州でも行われていた。商業活動には、綿花・オクラや魚の買い付け業者への販売、野菜・魚・林産物の地方市場における販売、商店経営、トラック運送業などがあつた。

## 4. ヒューマンネットワーク形成

ヒューマンネットワークの形成には、新たなネットワークの構築がなされる場合とネットワークの再構築がなされる場合とが考えられた。前者には婚姻、就学、就業などが考えられた。移住も新たな地縁関係の獲得という意味では前者に含まれるであろう。後者には、離婚、卒業、離職、所属教会の変更、村の独立などが考えられた。移住も、元々住んでい

---

\*5 小さい村では複数の村で1つのチームが、町では複数のチームが構成されていた。

た地域での地縁関係を考えると後者に含まれるといえる。また、婚姻は、婚姻前から血縁関係にあった場合では、前者というより、後者に含まれると考えたほうが適切かもしれない。本稿では、親族ネットワークの構築および再構築に強くかかわる婚姻に焦点を当て、ヒューマンネットワークの形成について考えていきたい。

#### 4-1. 結婚のきっかけ

全調査村の全ての夫婦に、結婚のきっかけ、二人はどのように出会ったかについて聞き取り調査を行った。主要な解答として、親戚、隣人、同じ学校の生徒、同一教会のメンバーとして出会い、結婚に至ったとの答えが多かった。また、その他に市場、サッカー場、伝統的ダンスの場にて出会ったという答えも見られた。つまり、3章で紹介したネットワークを利用し、姻戚関係というネットワークの構築が行われたことが明らかになった。この聞き取り調査については、今後調査村間で比較分析を行う必要がある。

#### 4-2. 通婚圏

婚姻によってヒューマンネットワークの構造がいかにより形成されているか考察するため通婚圏についての分析を行った。夫婦のそれぞれの出身地を、まず調査村との近接の度合いについて、次に旧地縁集団ごとの関係について分析を行った。ここでは、ダム建設前からサイト A に存在していた地縁集団 *Buleya* である *Siameja*、*Nagombe*、*Chande* と、建設時に新村をつくった集団 *Chilonga* である *Sianemba*、*Mambova*、*Siansima A* を取り上げた。

Fig. 10 は、夫婦の出身地と調査村との近接度合いについて分析したものである。Fig. 10-1 は、夫と妻の出身地がいずれも Site A である場合には *Village of Site A* とし、いずれかの出身地が Site A 外の場合には *Other Area* として、その夫婦の数を比較した図である。*Village of Site A* (夫婦の出身地が Site A の場合) は全体の約 57–80% と多かった。Fig. 10-2 は、夫婦の出身地がいずれも Site A である場合、出身地と調査地との近さはどの程度であるかを比較した図である。RN は調査村および隣接村、NBO は調査村から一つおいて隣の村、OSA はサイト A のそれ以外の村を表す。夫婦の出身地が RN である場合が約 44–77% であり、NBO の場合も含めると約 52–84% であった。つまり、今回分析した村においては、近隣村の成員同士の結婚が多いことが明らかになった。

Fig. 11 は、夫婦の出身地がいずれも Site A である場合に、それぞれ旧地縁集団のいずれに属するかについて比較した図である。B は *Buleya* を、C は *Chilonga* を、D は *Dangwe* を、L は *Landani* を、N は *Njola* を表し、& はそれらの地縁集団の夫婦の組み合わせを表す。Fig. 11-1 より *Buleya* の村では *Buleya* 同士の夫婦が約 38–56% と最も多く、Fig. 11-2 より *Chilonga* の村においても *Chilonga* 出身同士の夫婦が約 31–37% を占め最多であった。その結果、今回分析を行った村においては、その村の属す旧地縁集団の出身者同士の夫婦が最も高い割合を占めていることが明らかになった。